

# 「考えさせられる」葬儀(十四)

本来の意味を問い直す必要性

浄土真宗本願寺派総合研究所

浄土真宗本願寺派総合研究所では、葬送儀礼やお墓に関する調査・分析を続け、その成果について『宗報』に報告してきました。二〇二〇年以降は、新型コロナウイルス感染症が世界に蔓延し、葬送儀礼をはじめとする寺院活動の課題を浮き彫りにするなど、大きな影響がでています。そこで、社会を揺るがす非常時における葬送儀礼を考えていくために、二〇二〇年度は四回に亘って新型コロナウイルス感染症と葬儀の変化について報告いたしました(二〇二〇年八月号「考えさせられる」葬儀(九)、二〇二〇年十一月・十二月合併号「同」(十)・(十一)、二〇二一年三月号「同」(十三))。

二〇二一年四月二十五日、日本では三度目の緊急事態宣言が

発令されました。外出の自粛や3密の回避などが要請され、「葬儀」や「仏事」なども引き続き規模の縮小を余儀なくされています。世界中で新型コロナウイルス感染症が拡大し始めてから、すでに一年以上が経過していますが、残念ながら「仏事」をはじめとする「宗教行為／宗教行事」を「新しい生活様式」に即してどのように行っていくべきか。あるいは、宗教界・仏教界は新型コロナウイルス感染症がもたらしたさまざまな課題にどのように対応していくべきかについて、明確に示されるまでには至ってはいません。それほど、事態は混迷しているとも言えるのですが、事態の推移をただ見守り続けていくことも避けなければならぬと言えます。

そこで、この度は、現代世界における宗教性や霊性を研究しながら、近年は東日本大震災以後における日本人の生き方の変化や災害や貧困に寄り添う意識や実践の在り方にも貴重な提言を行われている弓山達也氏（東京工業大学教授）を講師としてお迎えし、「新型コロナウイルス感染症と宗教」をテーマに総合研究所にて研究会を行いました（二〇二二年八月三日）。

## 一、「スペイン風邪」と「コロナ」の違い

新型コロナウイルス感染症の拡大によって「人との接触」「3密」を避ける必要が生じたため、本来、「人との接触」を重要な要素としていた宗教行為／宗教行事に関して新たな方法が提示されました。オンラインでの法要、墓参りの代行サービスなどから、葬送儀礼における焼香のドライブスルー化など実にさまざまです。

弓山氏は、こうした現状に対して、「そうした行為がいいのか／悪いのか」「どれぐらいの人がそうした行為を行ったか」「宗教行為を自粛していいのか／悪いのか」といったことだけでなく、そもそもそうした新しい方法が「宗教的意味があるのか／ないのか」という根本的な部分への発言が宗教界・仏教界からなされていないことに「居心地の悪さ」があると指摘されました。その上で、弓山氏は、新型コロナウイルス感染症拡大下に

における宗教界・仏教界には、「宗教的意味や宗教の役割・意義をどのように宗教者が語り、発信していくかが求められているのではないか」と述べられました。

宗教界・仏教界は、声明・ガイドラインをそれぞれ発信していますが、弓山氏が指摘されたような内容の発信は少なかつたかもしれません。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大という状況において「どのようにすべきか」ということを見つけることが困難であることも否定できません。

こうした時、一つのヒントを見つけるために必要なことは「過去の経験から学ぶ」ということです。日本も、世界も、新型コロナウイルス感染症と同じように「未知の感染症」に苦しめられた経験があるからです。弓山氏は、百年前の「スペイン風邪」流行時と現在とを比較しながら、論点を提示されました。

スペイン風邪は、一九一八（大正七）年十月から一九二〇（大正九）年三月・四月頃まで断続的に約一年半にわたって流行しました。当時の世界人口の三分の一から二分の一が罹患し、一％程度が死亡したとされ、日本でも当時の人口の一％弱にあたる約七十四万人が死亡したとされています。このスペイン風邪の流行が、宗教・仏教に深く関わる点は、一九一八（大正七）年秋～一九一九（大正八）年春の「前流行」と一九一九（大正八）年秋～一九二〇（大正九）年春の「後流行」に分けられるとい



スペイン風邪の流行を伝える新聞記事（『東京朝日新聞』大正八年二月三日号：講師写真提供）

うことです。前流行と後流行の間は夏、つまりお盆がありますし、前流行・後流行期は年末年始を挟んでいます。二〇二〇年に新型コロナウイルス感染症が拡大して以降、日本でも話題となった「お盆の帰省や墓参り」「年末年始の帰省や初詣」などと同じ課題が、当時も存在していたということです。

そこで大正八年夏頃の新聞記事を確認すると、お盆や夏祭り、京都の祇園祭などは、例年通り賑やかに行われていたことがわかります。また、「後流行」にあたる時期の新聞記事でも、初詣や節分などは例年以上の混雑状況であったことがうかがえます。特に注目されるのは、『東京朝日新聞』二月三日の記事

では、二週間で千三百人の死亡があったという記事があり、節分にあたる二月五日の記事では、一日に東京だけで三百人が亡くなった記事と、節分を祝う行事などで市中が賑わう記事が同じ頁に掲載されていたことです。つまり、「スペイン風邪流行時」は、現在の「新型コロナウイルス感染症流行時」と同様に、多くの罹患者が存在し医療体制は逼迫しており、学校の休校、工場の閉鎖などの対応が行われていたにもかかわらず、宗教行事は盛んに行われていたということです。

## 二、「スペイン風邪」に対する認識

スペイン風邪と新型コロナウイルス感染症は、社会や人びとに対して、自粛や3密の回避など同様の困難を突きつけていた。それにもかかわらず、スペイン風邪流行時は現在と違って宗教行為／宗教行事は例年通り、あるいは例年以上に行われていたのはなぜか。

この問いは、弓山氏がスペイン風邪流行時の日記・記録や文学作品の記述をあわせて考えるとより興味深い問いとなると言われました。

例えば、当時の首相である原敬は、「スペイン風邪」に罹患しています。しかし、その動静が知られる『原敬日記』には、わずか三行程度しか記載がありません。首相が当時流行中の感

感染症に罹患することは、現在であれば大きく報道されるほどの出来事だと考えられますので、あまりにも記載が少なすぎるように考えられます。

また、小説には自身をモデルとしたものや、自身の状況を投影した作品があるため、当時の作品を見直してみると、例えば、与謝野晶子は「スペイン風邪」に対して怒りを示していますが、「天命」「運命」などと受け容れています。菊池寛は同僚の死に対して自分が助かって良かったといった言葉を書き記すなど、特徴的な表現がみられます。

スペイン風邪流行時の状況をどのように理解すればよいのかについて、例えば、「スペイン風邪流行時は現在と比べ衛生観念が乏しかった」という指摘ができます。しかし、弓山氏は、このことを明確に否定しました。なぜなら、スペイン風邪流行時にマスク着用や手洗い・うがいという感染症対策の必要性が叫ばれ、現在と同様に3密を回避するための注意書きの貼紙が当時の人口と同じほど配布されていたことなどから、感染症に対する知識や衛生観念はあったと言えるからです。

### 三、なぜ「宗教行事」は行われたのか

スペイン風邪流行時は現在と違って宗教行為／宗教行事は例年通り、あるいは例年以上に行われていたのはなぜか。この間

いに対して、弓山氏は三つの仮説をたて、検証されました。

第一に、「近代的空間」と「伝統的空間」という二つの空間の存在です。「近代的空間」とは、学校や病院、工場など近代になって創られた空間のことで、弓山氏は、ミシェル・フーコーの『監獄の誕生』を参照しつつ、「階層秩序化された監視の空間」にその特徴を見られました。一方の「伝統的空間」は、管理の対象とならない空間のことで、祭礼や年中行事・冠婚葬祭などの宗教行事や、祝賀会、行楽などが行われ、人びとがともに語らい・飲食する生活空間です。「スペイン風邪流行時」に人びとは、「近代的空間」と「伝統的空間」の二つの空間に生き、両空間を全く別のものとして捉えていたのではないかと指摘されました。

第二に、その「近代的空間」「伝統的空間」の二つの空間それぞれが公的な性格を帯びていたということです。「近代的空間」は国家などが管理できる「官」という公的性格を持つのに対し、「伝統的空間」は「世間」という異なる公的性格を持っていたと指摘されました。

第三に、「諦観」です。「伝統的空間」は、小説に見られるような、死をも包み込む柔軟さ、そして「生者と死者をつなぐ」役割や意味を有していました。お盆は、単なる帰省やレクリエーションではなく、死者と生者が交わり、「死者と生者をつなぐ」公的性格を持っていたと指摘されました。

弓山氏は、以上の三点から「スペイン風邪流行時」であつても、宗教行為／宗教行事は自粛されることなく、堂々と行われていたのではないかと指摘されました。

#### 四、苦難から気づきへ

宗教行為／宗教行事が、現在では単なる季節の行事やレクリエーションとして理解されている現状があるのに対して、その逆に季節の行事などが宗教行為／宗教行事として認識され直した事例を弓山氏は紹介されました。

それは、十年前の東日本大震災の後、民俗芸能が宗教行事に立ち返った「じゃんがら念仏踊り」の事例です。

沖縄県のエイサーの起源ともされる「じゃんがら念仏踊り」は、江戸初期にはじまった、福島県の民俗芸能です。震災前までは、地域のシンボル、海外交流の際のレクリエーションなどといった色彩が強く、後継者不足という課題があつたそうです。震災後は、異なる意味づけが付与されたといいます。「異なる意味づけ」とは、「じゃんがら念仏踊り」が「供養」や「あの世とこの世をつなぐ」という意味に理解されたということです。しかも弓山氏によれば、「異なる意味づけ」は宗教者ではなく、市井の人びとが担い手となり、「じゃんがら念仏踊り」が本来もつていた宗教的意味に立ち返るといふ経験が共有され

たことが原因であつたとされます。

このように、本来「宗教的行為や行事」でありながら、その意味や意義が認識されていないことであつたとしても、「人びとが直面する苦難」が「宗教的行為や行事」の意味を問い直し、認識し直すことにつながった点に、弓山氏は注目されました。その上で、新型コロナウイルス感染症の影響によって社会に不安や恐怖が広がる中で必要なことは、「宗教行事としての本来の意味を問い直すこと」ではないかと指摘されました。



じゃんがら念仏踊り（講師写真提供）

## 五、まとめにかえて

### ——新型コロナウイルス感染症拡大下で 求められる宗教の役割

新型コロナウイルス感染症と同様の状況にありながら、百年前のスペイン風邪流行時には、現在と異なり宗教行為／宗教行事は自粛されていなかった。その理由は、宗教行為／宗教行事が本来持っている「生者と死者をつなぐ役割」が人びとに当たり前のものとして、「世間」という「官」とは異なる公的性格をもっていたからである。そして、東日本大震災後に見られた事実からいえば、苦難においてこそ、その「宗教行事や行為の持つ役割」は問い直され、見直されていくといえる。

弓山氏が提示されたこの結論は、新型コロナウイルス感染症拡大によって、「宗教行事や行為を自粛すべきか否か」「これまでは違う行い方とはどのようなものか」といった具体的な対応に注視しがちな状況に対して、「そもそも宗教行事や行為はどのような意味や役割をもっているのか」「なぜ人びとは宗教行事や行為を大切にしてきたのか」「宗教者は社会が混乱しているからこそ発信すべきことがあるのではないか」といった問いを提示するものでした。例えば、昨年の夏、多くの人が帰省できずお墓参りもできない、といった悩みを吐露したとき、感

染拡大を恐れ葬儀に直接参列できず、オンラインで参列するしかない状況に不安を覚えたとき、宗教者は何を伝える必要があったのか。こうした問いに向き合う必要があり、同時に、弓山氏が「宗教者の使命」と表現された、宗教者自らが確認し、考え、自らの言葉で発信していくことの重要性が改めて認識させられました。

研究所では、弓山氏が「今だからこそ、一度立ち止まり、一般とは全く別の視点から発信ができるのが宗教者・宗教団体ではないか」という視点を大事にし、今後も、多様化する葬送儀礼や墓の変化に引き続き注視しつつ、浄土真宗の葬送儀礼における役割や意味を発信していきたいと考えています。

(報告者 岡崎秀磨・富島信海)



【講師紹介】弓山達也 (ゆみやま・たつや)

一九六三年奈良県生まれ。東京工業大学リベラルアーツ研究教育院教授。専門は宗教社会学(現代社会における宗教性)。著書に『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』(共著・二〇一九年、ハーベスト社)、『現代日本の宗教事情(国内編Ⅰ)』(分担執筆・二〇一八年、岩波文庫)など。